

書梁冀能挽滿彈其格五、六博、蹴鞠、意錢之戲其法今亦不傳矣、猜枚雖極鄙俚、亦有精其術者、吳門袁君著有拇經、自負天下無對、然余未之見、惟德清半月泉有行者百發百中、人多疑有他術、然實無之也、惟記性高耳、能記其人十次以上、則縱橫意之無不中、雜俎所謂察形觀色若辨盜者得之矣、

〔撈海一得〕藏鈎又藏疆トモ云、酒飲賭ニスル戲ナリ、

〔嬉遊笑覽雜四伎〕藏鈎和名抄に和名を載ざるは藏鈎と音にてとなへしなるべし、西土には藏闔とも藏疆とも云へり、

藏鈎例

〔文德實錄五〕仁壽三年二月乙丑、帝覽藏鈎戲、左右相分、飛鳥遊附者不禁、

〔三代實錄清十三和〕貞觀八年九月廿二日甲子、是日大納言伴宿禰善男、右衛門佐伴宿禰中庸、同謀者紀

豐城、伴秋實、伴清繩等五人、坐燒應天門、當斬、詔降死一等、並處之遠流、中相坐配流者八人、從五位

上行肥後守紀朝臣夏井配土佐國、略、中夏井兼能雜藝、略、中又善射、覆文德天皇與宮人爲藏鈎之戲、

一鈎藏在百手之中、密令夏井筮之、撰著布卦曰、有小女著青衣、以白花插首者、鈎在其左手中、帝乃探得大悅焉、

なんこ

〔倭訓栞後編十四〕なんこ、奕の類にいへり、幾子の義、西土にて猜枚或は猪拳、又辨拳といふ、九紙子又は小石頭を掌中に握り、其數を猜著しあつるを勝とす、

〔嬉遊笑覽雜四伎〕此戲鈎、藏をするさま古畫に往々あり、後世はよき人はせざりしにや、其内圓光大

師傳の畫に最多し、皆下部のもの、僧俗ともに見えたり、是をなごといふ、守武千句、今はよふとも

もどらしと思ふまけぬればなごの勝負もやめにけり、又握り拳はうき大はんにやなごよふに

六百貫やまけぬらん、續山井、握る手をてうか半とやかきわらひと云る句も是をいふにや、一代

男に、扇引なんこ呼て、おのづと子供心となつて云々、諸艶大鑑、手相撲なんこ呼もありといへり、

もとなごといふは、石なごの略なり、是をなんこといふより、何箇の義と思ふは非なり、何箇の義